

善光寺参詣曼荼羅の周辺

善光寺・戸隠信仰と「まいりの仏」 岩鼻通明

はじめに

善光寺如来分身寺の中で最古の伝説をもつといふ(注1)大阪府の小山善光寺所蔵の善光寺参詣曼荼羅は西山克氏による紹介(注2)以来、多方面から論じられてきており(注3)、本誌一九八八年一月号においてもカラー図版ですでに紹介されたことがある(注4)。

この善光寺参詣曼荼羅は、中央に善光寺の聖域が描かれるのに対し、両端には善光寺如来縁起の表現がみられるという、参詣曼荼羅と縁起絵の折衷的な絵画史料であり、参詣曼荼羅が縁起絵かという分類論に議論が集中してきた感がある。

それに対し、本稿においては善光寺参詣曼荼羅の上端部に描かれた戸隠山の信仰について、また善光寺信仰の伝播といわれる岩手県の「まいりの仏」の信仰について論じることから、善光寺参詣曼荼羅の周辺に位置する問題に言及してみたい。

善光寺参詣曼荼羅の戸隠・飯綱連山

善光寺参詣曼荼羅の上端部中央から左側にかけて、境内の外側に山地の表現がみられる。

この山地表現について、高橋氏は「雲がたなびく険しい山々がみえ、その中央に有翼の天狗像を配する、飯縄権現いひづなである。善光寺の背後、大峯・地附などの山々のさらに奥、一九〇〇mを越える標高を有するのが飯縄山(飯綱山)や戸隠の峯々である。飯縄修験と戸隠修験があるように、飯綱山と戸隠連峰とはもとより別々の山であり、祭神も飯縄権現と九頭龍権現で異なる。善光寺平から

は南側に位置する飯縄山をのぞむことができる。

飯縄修験は「飯縄の法」として中世には戸隠修験よりも盛んであったらしい。武田信玄や上杉謙信の信仰も厚く、謙信所用という甲冑(上杉神社所蔵、国重文)の兜の前立ては天狗の姿の飯縄権現である。本図にみえる山々や建物が具体性を持つものではないのはいうまでもないが、社などは山頂の飯縄神社や荒安の里宮などにあたるものだろう(注5)と述べる。

一方、西山氏は高橋氏とは若干見解を異にする点が見られる(注6)。まず、描かれた図像が「飯縄大明神」のアイコンであることは認めた上で(写真1)、画面上端左手に重層する三ブロックの山岳は戸隠連峰(戸隠表山と裏山、西岳・本院岳)であり、中央の一ブロックの山塊が飯縄山であるとす。飯縄大明神が戸隠連峰の中央に描かれた理由としては、絵師の地域認識のレベルに関わるとし、

飯綱山と戸隠連峰、あるいは飯縄修験と戸隠修験との差異を認識していなかったのではないかと解釈している。

また、善光寺参詣曼荼羅にこれらの山岳が描かれた理由については、これらの山岳霊

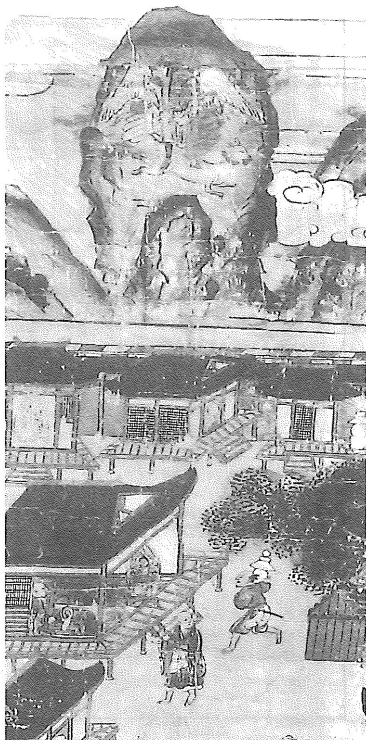


写真1 善光寺参詣曼荼羅に描かれた「飯綱大明神」(大阪市立博物館編「社寺参詣曼荼羅」平凡社刊より)

場と善光寺との間に教義上の癒着が隠されており、絵師が聖地としての善光寺の象徴的なテリトリーを、戸隠・飯縄を暗に含むものとして認識していたからではないかとみる。

戸隠三社の信仰

両氏の見解を踏まえた上で、筆者自身の解釈を述べてみたい。まず、善光寺参詣曼荼羅の upper 端に描かれた山岳は西山氏の指摘のように、左手は戸隠連峰、中央が飯綱山とみてまちがいない。ただし、戸隠連峰が三ブロックに描き分けられているのは戸隠三社（明治の神仏分離以前は戸隠三院）に対応するものではなからうか。

戸隠の名は平安時代末期の『梁塵秘抄』に記載され、当時から霊山として中央にもその名が知られていた。近世初期の戸隠山顕光寺は本院（奥院）一・二坊、中院一・四坊、宝光院一七坊から形成され、顕光寺別当は中院に置かれていた（注7）。画中の三ブロックの山岳のうち、両端には社殿が描かれており、これらを高橋氏の説のように具体性を持たない表現とみるよりは、戸隠三社の表現と筆者は理解したい。

それでは、なぜ戸隠山の中央に飯縄大明神の図像が描かれているのであろうか。西山氏の説のように、絵師が飯縄修験と戸隠修験を混同したわけではなく、戸隠山、とりわけ宝光社と飯綱山とは密接な関係が存在するのである。たとえば、宝光社の社家である越志家（旧広善院）には飯縄大明神の掛軸が伝来している（写真2）。

また、天保一四年（一八四三）刊行の『善光寺道名所図会』によれば、「遠州秋葉三尺坊は教釈院の住居にてありしが、後に天狗道に入と云々」とあり、教釈院とは宝光社の社家の岸本家である。岸本家は現在も秋葉三尺坊大権現本官を称し、戸隠講の講員の他に秋葉講の講員も有している。近年の説、ても、秋葉三尺坊の出身は戸隠山教釈院とする見解が有力であるが（注8）、実はこの秋葉三尺坊の図像（図1）は飯縄大明神と近似した「鳥類型天狗（烏天狗（注9））」なのである。

一方、民間信仰として戸隠中社集落に飯縄講が存在しており、六月六日の講日には当番が飯綱山頂の社に参拝する（注10）。さらに、戸隠山の開山縁起においては、開祖の学問行者がまず飯綱山に上り、それから戸隠に入って寺を開いたと伝えられている（注11）。以上のように、戸隠と飯縄大明神との関係は密接なものがあり、戸隠山の中央に



写真2 飯綱大明神の掛図（長野県戸隠村宝光社、越志家蔵。一九八五年七月筆者撮影）



図1 秋葉山三尺坊

飯縄大明神の烏天狗が描かれてもけっして不思議ではないといえよう。

なお、中社の社家である武田家（旧妙光院）には「戸隠山惣山之図」と裏書された小幅の掛軸が伝来する（写真3）。この絵図はまさに「戸隠山参詣曼荼羅」と称してさしつかえないものと思われる。絵図の下部に中社と宝光社の門前集落を描き、上半部には奥社とその背後にある三三カ所の霊窟

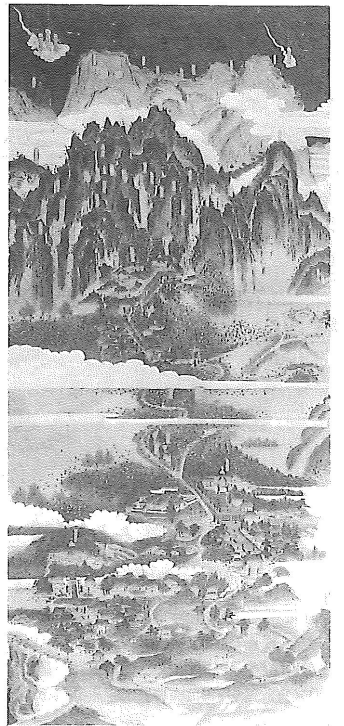


写真3 戸隠山惣山之図 (長野県戸隠村中社
武田家蔵。一九八五年七月筆者撮影)

を配し、上端部の戸隠連峰の上空に御来迎を描くという構図は、小幅ながら参詣曼荼羅にふさわしいものである。また、一部ではあるが、中社と宝光社の門前には参詣者の表現もみえ、参詣曼荼羅に共通してみられる特徴を備えている。

善光寺信仰の伝播と「まいりの仏」

中世に高野聖が高野山信仰を全国に広めたのと同様に、善光寺聖も全国各地に善光寺信仰を伝えたのであった。東北地方への善光寺信仰の伝播を跡づけるものは「まいりの仏」と「かくし念仏」¹²⁾「および浄土宗名越派^{なごえ}であるという。また、阿弥陀如来と聖徳太子を併せて礼拝するのは善光寺信仰の特色で、これが「まいりの仏」であると五来重氏は指摘した(注13)。

「まいりの仏」は若手県における特徴的な民間信仰のひとつであるが、別名「十月仏」といわれるように、旧暦十月の定例日に、阿弥陀如来像・六字名号・孝養太子像・黒駒太子像などの掛図、あるいは聖徳太子像などの木像を祀る民家や民間のお堂に同族縁者などがお詣りする信仰であるといふ(注14)。

また、「まいりの仏」の画像にはかなり古いものも存在し、南北朝期から室町期の作成という銘文や裏書のあるものが十数点にも達するといふ「まいりの仏」の源流は若手県へ真宗が伝播してきた初期の布教の姿を示しつつ、江戸期のキリシタン弾圧以降、寺と檀家との結びつきができてから、各宗系の庶民が真宗系の同族信仰形態をまねて、今日まで存続させたものとされる(注15)。

「まいりの仏」と善光寺参詣曼荼羅

この「まいりの仏」の掛図の中に参詣曼荼羅に含めることのできる絵画史料がひとつ存在するのである。この参詣曼荼羅については、概要が吉川保正氏によって報告されている(注16)。

吉川氏によれば、この盛岡市公民館蔵の「まいりの仏」の掛図は二幅からなり、第一幅は「与願弥陀立像図」、第二幅に「寺院景観図」という呼称が与えられている。第一幅の阿弥陀如来図は「まいりの仏」の掛図にしばしばみられる画題であるが、第二幅のように寺院景観を表現したものは唯一であり、貴重な例といえよう(写真4)。

吉川氏は本図を社寺曼荼羅と呼ばれる景観図であると、きわめて素朴で軽妙な画態であると指摘している。描かれた寺院景観については、長谷寺、興福寺、あるいは吉備津彦神社の可能性があると、聖徳太子信仰との関連からは天王寺とか鶴林寺の景観にふさわしいとも述べている。また、七〇人もの参詣人物が描かれている風俗画としても貴重であるとの指摘を行なっている。

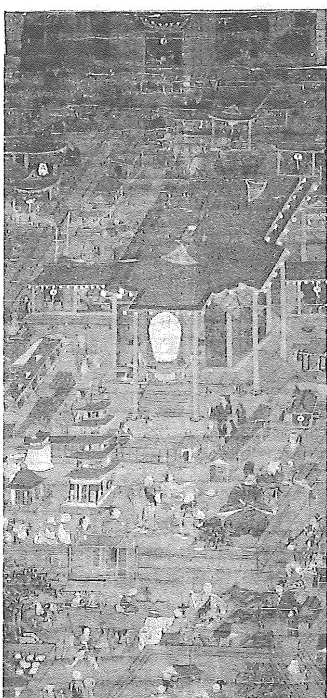


写真4 「まいりの仏」の寺院景観図 (盛岡市中央公民館蔵
一九八八年六月筆者撮影。一〇八・五cm x 五一・五cm)

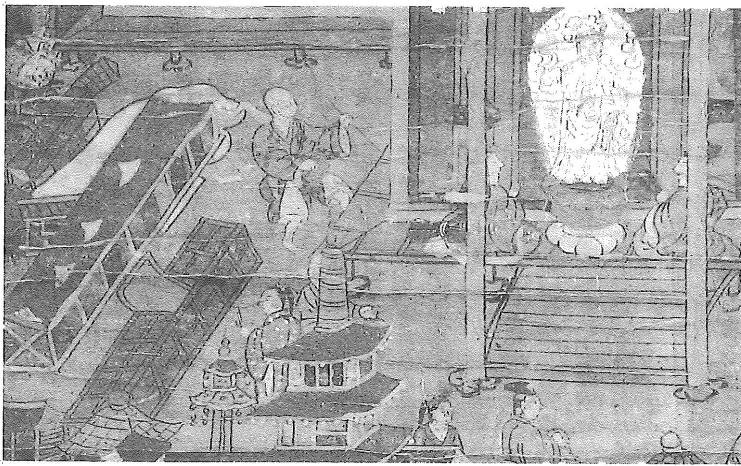


写真5 「寺院景観図」に描かれた琵琶法師

確かに、この図中には多くの参詣者の表現がみられ、本堂の脇には琵琶法師が描かれるといった参詣曼茶羅に共通してみられる人物配置が存在する(写真5)。ただ、寺院景観や人物の描写は参詣曼茶羅の通例からみても、かなり稚拙であり、伝来や裏書などからは不明であるが、ローカルな絵師の手によるものかとも思われる。立山曼茶羅のよ
うな、地方の社寺に伝来する参詣曼茶羅には、畿内の西国霊場に伝来する参詣曼茶羅とはかなり雰囲気異なる稚拙な表現がしばしばみられ、そ

これらの作成にあたった絵師の所在については今後検討を進めねばならない課題である。

それでは、この「まいりの仏」の寺院景観図に描かれているのは、いったいどの社寺に該当するのだろうか。吉川氏の示唆した長谷寺、興福寺などの境内が描かれているとはどうも判然としないのであり、むしろ、大阪市立博物館編の『社寺参詣曼茶羅』(平凡社刊)を眺める限りでは、善光寺参詣曼茶羅に描かれている境内の景観に比較的に類似しているように思われてならない。

もとより、この「まいりの仏」の掛図には文字注記も全くなく、その表現内容が善光寺であるという確証はないわけであるが、前述のような善光寺信仰の東北地方への伝播を考慮に入れると、本図が「善光寺参詣曼茶羅」である可能性は多少なりとも出てくるのではなからうか。

以上のように、本稿においては、これまで参詣曼茶羅としては紹介されることのなかった、地方に伝来する二点の絵図を扱ってみた。

今後も、絵図関係の調査研究が進めば、各地の社寺に眠っている参詣曼茶羅に新たな光があてられる機会が出てくることであろう。

(いわはなみちあき人文地理学)

注

- (1) 坂井衡平 『善光寺史(上)』東京美術、一九六九年。
- (2) 西山克 「社寺参詣曼茶羅についての覚書」 『藤井寺市史紀要』七、一九八六年。「社寺参詣曼茶羅についての覚書」 『藤井寺市史紀要』八、一九八七年。
- (3) 高橋平明 「新出の『善光寺参詣曼茶羅図』について」 『長野』一三四、一九八七年。
- (4) 西山克 『女帝』の墮地獄 善光寺参詣曼茶羅をテクストにして 『信濃』三九二、一九八七年。
- (5) 拙稿 「参詣曼茶羅ことはじめ 社寺参詣曼茶羅の世界」 『月刊百科』三三三、一九八八年。
- (6) 前掲注(3) 参照。
- (7) 拙稿 「観光地化にとまなう山岳宗教集落戸隠の変貌」 『人文地理』三三三、五、一九八一年。
- (8) 田村貞雄 「秋葉信仰の形成」 『地方史静岡』三三、一九八五年。
- (9) 宮本袈裟雄 『天狗と修験者 山岳信仰とその周辺』人文書院、一九八九年。

- (10) 拙稿 「戸隠中社の講集団」『あしなか』一九八六年。
- (11) 前掲注(1)参照。
- (12) 門屋光明 『隠し念仏』東京堂出版、一九八九年。
- (13) 五来重 『善光寺まいり』平凡社、一九八八年。
- (14) 門屋光昭 『まいりの仏(十月仏)の祭祀前篇』『岩手県立博物館研究報告』三、一九八五年。
- (15) 司東真雄 『岩手の歴史論集 中世文化』一九七九年。
- (16) 吉川保正 「岩手庶民史の中の古仏画 盛岡市公民館収蔵古仏画について」『奥羽史談』五二、一九六九年。